

キーワード：より良いコミュニケーション、SNSの利用、クリティカルシンキング

I 研究について

1 情報モラル教育に関する学校の課題

全校生を対象に行った「ふくしま情報モラル診断」では、情報モラルに関する「診断問題得点率」とインターネットの「使用状況」に関する分布結果において、得点率が良好(60%以上)であるA・B群に所属する生徒が39%、平均的な得点率にある(40%~60%)C群の生徒が42%、D群に位置する生徒は19%程度となっており、一見するとおおむね良好であった。しかし、A・B群に属している生徒でも「使用状況」の指標が低かったり、C群に属している生徒の中でも要対応の分布に近接している生徒が半数程度いたり、SNSを含む情報モラルに関する「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」を育む必要が大いにあることが分かった。

そこで、本校では、「ふくしま情報モラル診断」の結果を踏まえ、**SNS等を含めたインターネットの適切な活用の仕方についての研究**を行うこととした。校内研修では、指導案作成において医療創生大学教授の中尾剛先生から助言を受けたり、校内授業研究会において指導助言や講演をいただいたりすることで、本校教職員の指導力向上を目指した。

2 実践の概要（授業実践、授業研究会等）

時 期	実 施 内 容
5月下旬	「ふくしま情報モラル診断」の実施
6月27日	第1回地区別研究協議会で発表
7月 7日	第1学期保護者会「情報モラル講演会」 講師 会津若松警察署少年女性安全対策課 鈴木 麻友 様
7月10日	第1回 校内研修「校内研究授業事前検討会①」
7月18日	第1回 校内授業研究 第2学年 学級活動 「相手の気持ちを考えたコミュニケーション」 指導助言者 医療創生大学心理学部 教授 中尾 剛 様
11月 1日	第2回 校内研修「校内研究授業事前検討会②」
11月 8日	第2回 校内授業研究 第3学年 学級活動 「自分の行動への責任」 指導助言者 医療創生大学心理学部 教授 中尾 剛 様
11月20日	第3回 校内研修「研究の成果と課題」についての話し合い
12月12日	第4回 校内授業研究 第1学年 学級活動 「使いすぎているかな？」
12月15日	第4回 校内研修「実践のまとめ」
2月14日	第2回地区別研究協議会で発表

Ⅱ 研究の実際について

1 校内での実践

○ 全学年 情報モラル講演会（7月7日）



1 学期末の授業参観・保護者会の際に「情報モラル講演会」を実施して、全学年の生徒及び保護者、教職員が同じ話を聞く機会を設けた。講師に会津若松警察署少年女性安全対策課より鈴木麻友様をお招きして講話いただいた。県内の児童生徒が犯罪に巻き込まれた事例を具体的に紹介していただいたことで、被害者や加害者にならないようにするための、SNS の望ましい活用方法について考えることができた。

2 校内授業研究会での実践等

（1）第2学年 学級活動「相手の気持ちを考えたコミュニケーション」の実際



この授業では、「自分と他者の考え方は同じではないということに気付くこと」「自分の考えや気持ちを上手に伝えるための方法について考えること」をねらいとした。

「LINEみらい財団」が提供するラインのグループトークのカード教材を見ながら、各グループで今後の会話の展開を予想したり返信を書いたり、書いたものを交換して互いにどのように感じるかを判断したりした。また、トラブルが発生する可能性が高いメッセージとそうでないものを比較し、どのような違いがあるのか意見を交換した。

LINEという身近なツールについて話し合いを行ったことで、自分事として捉えながら意欲的に授業に臨んでいた。「よりよい人間関係を形成するためには、相手の気持ちや考え方に寄り添うことが大切」ということを確認することができた。

(2) 第3学年 学級活動「自分の行動への責任」の実際



この授業では、「メディアから得る情報を正しく扱うために必要なことについて考える」ことをねらいとした。

「LINEみらい財団」が提供する GIGA ワークブックを利用しながら、情報の偏りや信憑性についての個人の捉え方をグループで共有した。

グループでの会話から「自分に都合のよい情報」や「発信者の主観」など、鵜呑みにするのは危険な情報があることに気付き、全体の場で共有することができた。

また、「発信者の確認」や「複数の情報の比較」によって情報の成否が判断できることも学ぶことができた。

生徒は、「視野を広くもち、情報を正しく判断できるようにしたい。」などの感想をもった。



(3) 研究協議会の様子



(第1回研究協議会)



(第2回研究協議会)

第1回の協議会では、「生活体験に即した課題のため、自分事として捉えていた。」「タブレットを活用して考えを共有させてもよかったのではないか。」「生徒にじっくり考えさせる時間を確保するため活動を精査するとよいのではないか。」などの意見が交わされた。

第2回の協議会では、「教師の問い直しによって生徒の考え方に深まりが見られた。」「T1・T2の役割・連携がとれており、メリハリがあった。」「災害避難、防災教育の観点でも学びがあった。」という意見が交わされた。

2回の研究協議会を通して、育てたい力、身に付けさせたい資質・能力について全職員で共有し、教科等横断的な学びも意識しながら情報モラル教育を進めていくことの重要性について確認したり、生徒同士の議論を活発にさせるためのコーディネート の在り方について考えたりすることができた。

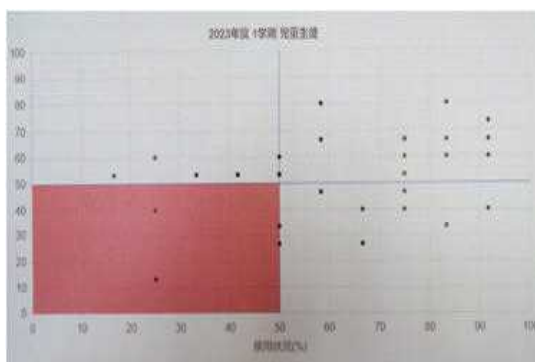
3 「ふくしま情報モラル診断」の比較について

(1) 「ふくしま情報モラル診断」の概要

情報モラルに関する「診断問題得点率」（文部科学省より出された情報モラル指導カリキュラム表に示された計5分類の項目による診断問題）とインターネットの「使用状況」（内閣府より出されたアンケートの調査項目）について回答し、その結果を分布図にした。（縦軸が前者を表し横軸が後者を表す。分布が**右上に集まるほど、望ましい状態**と言える。）

学期ごとに診断問題自体は更新されるが、毎学期実施することにより、生徒の実態や情報モラルに関する「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」等を把握できると考え、実践した。

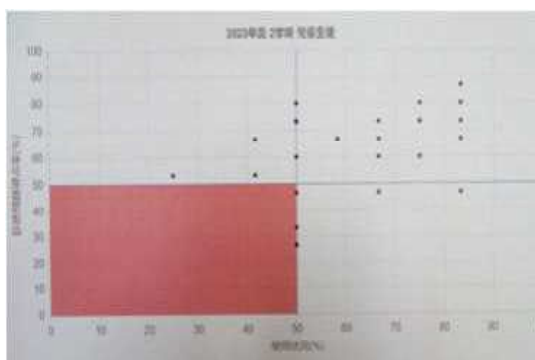
(2) 1学期の診断結果



- 診断問題得点率○ 使用状況○ 37%
- 診断問題得点率△ 使用状況○ 27%
- 診断問題得点率○ 使用状況△ 24%
- 診断問題得点率△ 使用状況△ 12%

第1回目の診断で、上記の結果が得られた。第2回目にはより望ましいとされる分布図の右上に回答が集まるよう、全教職員で共通理解を図り、日々の実践を行った。

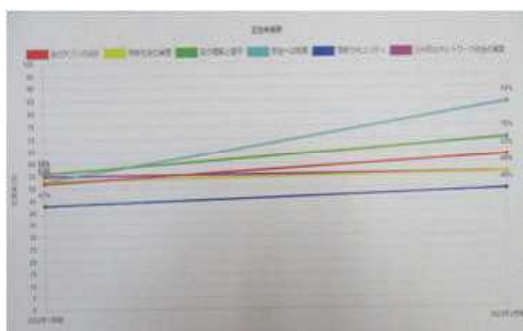
2学期の診断結果



- 診断問題得点率○ 使用状況○ **48%**
- 診断問題得点率△ 使用状況○ 31%
- 診断問題得点率○ 使用状況△ 7%
- 診断問題得点率△ 使用状況△ 14%

第2回目の診断結果である。診断問題得点率・使用状況ともに望ましい状況にある生徒の割合が大きくなった。改善していないように見える数値があるが、境界線上にある生徒は「△」として計算したためであり、分布図をみると全体の傾向として右上に集まってきていることが分かる。指導の成果が表れているものと考えられる。

(3) 1・2学期の診断問題得点率の推移…全カテゴリにおいて向上が見られた。



	1学期	2学期
情報社会の倫理	53%	56%
法の理解と遵守	56%	70%
安全への知恵	53%	84%
情報セキュリティ	43%	49%
公共的なネットワーク 社会の構築	55%	56%

4 講演 「これからの情報モラル教育」～情報モラルとデジタル・シティズンシップ～
講師 医療創生大学心理学部 教授 中尾 剛 先生



中尾先生には、これからの時代に求められる情報モラル教育はどのように推進していけばよいかということについて、ご自身の研究資料を基に講演いただいた。デジタルネイティブ世代の子どもたちの現状を踏まえ、ICT を正しく「自律的」に活用するための教育として、「ネット（メディア）リテラシー教育」「情報モラル教育」「デジタル・シティズンシップ教育」の必要性について教えていただいた。「考え方と態度」のみを身に付けさせて終わりせず、学校では、そこに加えて「能力とスキル」を身に付けられるように「悪い使い方」と「善い使い方」とはどのようなことを学習させること、「禁止」から「子ども主体で考える」という教育への転換が必要であるということ学んだ。

デジタル・シティズンシップ教育を推進していくために、子どもたちが試行錯誤し議論したり、意見を述べ、説明したりする機会を設けること、価値観にはズレがあることに気付かせ、多様な価値観を認め合う心を育てていく必要があることなどを、教えていただいた。

Ⅲ 成果と課題について

1 成果

- 「ふくしま情報モラル診断」を活用したことで、生徒や保護者の「情報モラル」に関するレディネスを正確に把握することができ、授業や研修に生かすことができた。また、生徒一人一人の情報モラルの変容も客観的に捉えることができた。
- 「ふくしま情報モラル診断」の結果をふまえ、授業実践のみならず保健指導や生活改善に向けた取り組みを行うことができた。
- 指導助言や講演を通して、学習指導要領に明確に位置付けられている「情報活用能力」を生徒に育成するために、今後どのような指導を行っていけばよいかということ、教職員が自分事として捉えることができた。

2 課題

- 今年度は、学級活動の時間を中心に実践を行ったが、教職員全員で行うために、次年度は、学校の教育活動全体を通して実践できるよう教育課程に位置付ける必要がある。
- 「情報モラル診断」の保護者からの協力を得ることに苦心した。学校だよりや学級通信等を通して保護者への情報モラルの啓蒙を図り、保護者を巻き込んだメディアリテラシーの向上に取り組んでいきたい。

【引用文献・参考文献・参考 URL】

- ・ 文部科学省(2018).「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）」.
- ・ 文部科学省(2018).「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編」.
- ・ ふくしま情報モラル診断問題等作成委員会.「ふくしま情報モラル診断」.
<https://fukushima-infomoral.jp/general>(参照 2022-2-21)
- ・ 一般財団法人 LINE みらい財団.「情報モラル教育教材」.
<https://line-mirai.org/ja/>（参照 2022-2-21）
「『楽しいコミュニケーション』を考えよう！リスクの見積り編」.
「情報防災訓練」.
「SNSノート情報モラル編 活用の手引」.